2018年4月15日

中原キリスト教会：日曜礼拝

　　　　　　　　　　　　　　**「ネヘミヤの祈り」**

聖書箇所：ネヘミヤ記9:32-37

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　今日はネヘミヤ記です。エズラ記の次にある歴史書です。ネヘミヤはエズラと同時期の人物です。両者がバビロンからエルサレムに帰還したのは、ネヘミヤが先という説と、エズラが先という説がありますがエズラが先、というのが通説です。ネヘミヤの帰還はBC445で間違いのないところですが、エズラの帰還はBC458とBC398という説があります。エズラの方が後、と言う説は、もし、エズラの方が先とすると、エズラによる改革は失敗し、ネヘミヤが改めて改革しなければならなかった、ということになり、後世に伝えられたエズラの名声からしておかしい、というのが一つの根拠です。しかし、カナンの地の地場信仰や、サマリヤの帰還のユダヤ人からすれば異教化したイスラエル信仰は極めて強力で、学者エズラの改革では浸透できず、政治的指導者としてのネヘミヤの登場をまたねばならなかった、と解釈し、エズラ、ネヘミヤの順序で歴史を見るのが妥当と考えられます。両者が協力して改革を進めたと推測される箇所もありますのでエルサレムでの時期が一部重なっている、と推察されます。実は、エズラ記、ネヘミヤ記の両文書の関係についても議論があります。旧約聖書ヘブル語原典はエズラ記に続きエレミヤ書の記述があり、ネヘミヤ書というのは欄外の注記であるだけです。従って、両文書は一つの文書として扱われていたと推測されます。ギリシャ語訳の七十人訳ではエズラ記・ネヘミヤ記が一つで第二エスドラス書という文書になっています。エスドラスというのはエズラのギリシャ語読みです。第一エスドラス書というのが正典聖書には入っておりませんが別途存在します。これはエズラの改革について詳しく書いたものです。エズラの偉大さを書き記す意味があったものと思われます。中世ローマ教会で正典として扱われたラテン語訳では、現在のエズラ記が第一エズラ記、ネヘミヤ記が第二エズラ記、七十人訳の第一エスドラス書が第三エズラ記、そしてこれらとは別に黙示録の形式をとった第四エズラ記と4種類のエズラ記になりました。ユダヤ教の聖典、タナクといいますが、は今我々が手にする聖書のようにエズラ記とネヘミヤ記の二つだけです。ローマカソリックはラテン語訳を踏襲し、第三エズラ記をエズラ記（ギリシャ語）、第四エズラ記をエズラ記（ラテン語）として聖書に収録しています。私たちは、ユダヤ教正典即ち宗教改革者の伝統を受け継ぎ、聖書の文書としては二つのみとし、これら以外のエズラ記については参考文献として扱うことに致します。エズラ記、エステル書の二書に限ってみても、エズラの律法朗読の記事がネヘミヤ書の8章になっていたり、外国人の女を妻とすることの禁止が両文書に無関係なように載っていたりして、当初の一つの文書と考えられる時から、両文書が分離されるようになるまでの過程は定かではありません。時間的順序で考えようとすると、とびとびになることは避けられません。聖書は信仰書ですから、時間的順序を無視して文章の脈絡の関係から記述の順序が決められている場合があります。それはそれとして解釈すれば良いのであって、記述の順序が必ず時間的順序である、と無理に理解し、「矛盾だ」と騒ぐ必要はありません。我々にとって必要なことは、歴史的事実として承認すること、と信仰的な面からの解釈です。このようなことは新約聖書でもなくはありません。もう一点文書についてです。我々の聖書では、エズラ記の前は歴代誌です。第二歴代誌の一番最後にはペルシャ王クロスの元年にエルサレムへの帰還許可のことが書かれていますが、次の文書エズラ記の一番最初も同じ事柄について類似の言い回しで書いています。これをみると、エズラ記は歴代誌の続きであったのではないか、それが分離される時、歴代誌の最後にエズラ記の最初を付け加えたのではないか、と解釈されます。この理解が正しいとすれば、最初は歴代誌からネヘミヤ書まで一つの文書だった、ということになります。

　エズラ記・ネヘミヤ記を通してみて、歴史的出来事はどんな順序であったのか見てみます。最初はこのクロス王の勅令です。エルサレムに帰って神殿を再建せよ、という訳です。エルサレム帰還の頭はシェシュバツァルです。「ユダの君主」と言われています。しかし、実質的なリーダーは総督ゼルバベルと祭司ヨシュアです。総督は県知事のようなものです。ペルシャ王から任命・派遣されました。彼等はかなりの数のユダヤ人を連れて帰り、すぐ神殿再建を始めます。しかし現地住民やサマリヤの指導者たちの抵抗にあいました。そして彼らは、ペルシャ王に直訴し、工事は一次中断致します。ペルシャ王がクロスの次のカンビセス王の時です。ペルシャ王が次のダリヨスI世になってから、預言者ハガイ、ゼカリヤの活躍によりダリヨス王は神殿再建の復活を許可します。当時の総督タテナイ等の支援あり、BC515年に再建がなされました。しかし、曾ての神殿に比するとかなり小さいものであったようです。神殿奉献式等は行ったものの、現地の人々の宗教は「主なる神」への信仰に相応しくないものでした。またサマリヤ人等からの圧迫も続いています。その宗教的状況を正すためにBC458年頃、律法学者のエズラがエルサレムにやってきます。同道したユダヤ人も多数いました。そしてモーセの律法に基づく宗教改革が行われました。ネヘミヤ書8章のエズラによる律法朗読がこの時なされます。宗教改革、なかでも異教徒の妻を離縁し、子供を追放しヤーヴェ信仰の純粋さを回復する、ということを行ったようです。これは近隣の民族にイスラエルに対する反感を引き起こした、と予想されます。ネヘミヤが後に同じ命令を再度下していることからしてエズラの時代には徹底していなかった、と想像されます。一応、神殿が完成した後も拡張・修復の工事が行われていたようですが、「ユダとベニヤミンの敵」と称せられるサマリヤの指導者たちの妨害活動がなされていたようです。ペルシャ王アルタシャスタの時代です。王の命令により中断した時もありました。そしてダリヨスII世の時まで中断したと書かれています。エズラ書4章です。この工事中断の話は、先のカンビュセスが王の時の話と類似しています。同一のことが言いかえられているのではないか、と言う理解がエズラのエルサレム帰還をずっと後にする説の理由でもありますが、我々は、別の類似の出来事があった、と理解します。このような神殿再建や宗教改革も順調にはいかない状況のなかで、BC445年ネヘミヤがエルサレムに帰還します。彼の目標はエルサレム城壁工事です。この工事を始め、各種の政治的政策を実行するとともに宗教改革も行います。城壁工事はBC438年に完成します。その後、BC433年にネヘミヤはバビロンに一時帰国し再度エルサレムに来たようです。ネヘミヤの活躍の時期はペルシャ王アルタシャスタ、正式名アルタ・クセルクセスI世の時代です。アケメネス朝ペルシャの隆盛期と言って良いでしょう。一つ付け加えることがあります。エステル記のことです。この文書はバビロンにおいてユダヤ人皆殺し計画が発生し、王妃となったエステルが王を説得し、阻止する話ですが、エステルが王妃となったのがBC479年と推定されていますからエステル記の出来事が起こったのは、ゼルバベル、ヨシュアの指導の下、一応神殿再建がなされたのち、エズラが帰還するまでの間、ということになります。このエステル記に記載されたことがあったため、ペルシャ王朝が再びユダヤ人に寛容政策をとるようになり、エズラが帰還できる環境ができた、と理解することができます。

　これらの理解を前提にすると、ネヘミヤ書を前から読んでいっても混乱しないで済みます。まず1章にネヘミヤがエルサレム帰還を決断する契機と彼の血のにじむような祈りがあります。祈りの後半部分をお読みします。1:8-11です。「しかしどうか、あなたのしもべモーセにお命じになったことばを、思い起こしてください。『あなたがたが不信の罪を犯すなら、わたしはあなたがたを諸国民の間に散らす。9 あなたがたがわたしに立ち返り、わたしの命令を守り行うなら、たとい、あなたがたのうちの散らされた者が天の果てにいても、わたしはそこから彼らを集め、わたしの名を住ませるためにわたしが選んだ場所に、彼らを連れて来る』と。10 これらの者たちは、あなたの偉大な力とその力強い御手をもって、あなたが贖われたあなたのしもべ、あなたの民です。 11 ああ、主よ。どうぞ、このしもべの祈りと、あなたの名を喜んで敬うあなたのしもべたちの祈りとに、耳を傾けてください。どうぞ、きょう、このしもべに幸いを見せ、この人の前に、あわれみを受けさせてくださいますように」とあります。“イスラエルの民は主なる神が贖われた民ですから、どうか救ってください、私の祈りに答えてください、民にあわれみを賜りますように“と祈っています。ここで「贖う」と訳されているのは、「パーダー」と言う言葉ですが、そもそもは「買い戻す」と言う意味ですが「救う」という意味になって行きます。ここでは「救い」と意味で理解して良いと思います。「買い戻す」即ち「贖う」ことが「救い」なのです。この言葉のギリシャ語は「リュートローオ」で、やはり、「贖う」という意味と「救う」の意味があります。この名詞形が「リュートロン」ですが「贖い」の意味が強く「救い」という意味ではあまり使われません。そのため、新約聖書では、一般的な救いという意味より、主イエスの業である「贖い」即ち、自らの命を代価とした民の救い、の意味で使用されています。ヘブル語とギリシャ語では一対一で意味が同一という訳には行きませんので、その強調している側面が異なる、ということは良くあります。このネヘミヤの切々たる祈りを読むと、私たち新しきイスラエルも選びの民として熱心に人々のために祈ることを求められている、ということに気づかされます。「熱心に」です、「力をこめて」です、そして「情熱をかけて」です。

　1章の最後でネヘミヤは「献酌官であった」と言われています。直訳は「杯を携える者」ということです。口語訳では「給仕役」、と訳されていますが「献酌官」のほうが良いと思います。単なる給仕役ではなく、王と食事を共にする立場にある高官と解釈されます。「王の護衛役」でもあったのではないか、と言われています。今でいう秘書官でしょう。なおギリシャ語訳では「宦官」となっています。2章では、イスラエルの地に着くとさっそくサマリア人サヌバラテ、アモン人役人トビヤが妨害行為に出てきます。この二人はずーとネヘミヤのやることへの妨害者として登場します。3章では門の建築、城壁の建築、更には墓の修復、貯水池の構築などが述べられています。個人の家の修理もあったようです。4章ではサヌバラテ、トビヤなどが工事の進行をみてエルサレムに攻め入ることを計画していたことが書かれ、これに対しネヘミヤは工事をする者と武器を持って警戒する者に分け、交代制で工事を進めたことが書かれています。5章では貧しい「民とその妻」はこの工事について不平を言いました。工事なんかより食い物を得ることのほうが大切だし、今でも、自分たちは借金で首が回らなくなっているのだ、というのです。そして金を貸している町の有力者に、帳消しにするよう要求します。そして実行させます。こういう自分は「十二年間、私も私の親類も、総督としての手当てを受けなかった」と言っています。民の労役を見ると総督手当を要求などできない、というのです。おそらく、財産を取り崩して質素な生活をしていたのだと思います。5:19で「私の神。どうか私がこの民のためにしたすべてのことを覚えて、私をいつくしんでください」と祈っています。6章ではサヌバラテ、トビヤが“ネヘミヤが民をたぶらかして王となろうとしている”などと言いふらしている文書の事などが書いてあります。ネヘミヤは「ああ、今、私を力づけてください」と叫びの祈りをします。しかし、突貫工事でがんばったおかげで、城壁は着工から52日の短期間で完成させることができました。ユダヤ暦の6月25日です。太陽暦では8月初になるだろう、と思います。ネヘミヤ帰還から7年後です。従って、城壁再建工事の着工はネヘミヤがエルサレム帰還後しばらくしてからだ、ということが解ります。完成後もトビヤは脅迫文のようなものを送って来たりしていました。

　次の7章にはネヘミヤが最初の帰還の民の系図を見つけたことが記載されています。エズラ書2章とほとんど同じです。8章は先ほどもうしあげた学者エズラの律法朗読の記事です。8:3には「水の門の前の広場で、夜明けから真昼まで、男や女で理解できる人たちの前で、これを朗読した。民はみな、律法の書に耳を傾けた」と記されています。ユダヤ暦7月1日です。太陽暦では9月末頃です。エズラ書にはこれに対応する記事はありません。なお、この月の22日にいまでも「律法の祭典」というのがあります「シムハット・トーラー」と言われています。申命記の最後の部分と創世記の最初の部分を同時に読むそうです。8:14には二日目に7月のお祭りの間中仮庵に住まねばならない、という律法を発見します。これがユダヤ三大祭仮庵の祭りの由来です。三大祭というのは過越し祭、七週の祭り、仮庵の祭りです。過越し祭は「最後の晩餐」の日、七週の祭りは我々ではペンテコステですが、仮庵の祭りに対応するのはThanksGivingDayです。収穫祭です。仮庵の祭り、というのは出エジプトの時、そまつな仮の庵に一時的に住んだことを思い出すため、ということになっています。ヘブライ語ではこの祭りはスコットと言います。7日目最後の日はホシャナ・ラバーと言います。この「ホシャナ」はホサナ（救い給え）のことです。そして詩編115:25を読むそうです。「ああ、主よ。どうぞ救ってください。 ああ、主よ。どうぞ栄えさせてください」という一節です。この翌日から今度は先の「律法の祭り」に続きます。

　ユダヤ教にはお祭りが多いです。ここのお祭りの由来は地場の農業関連の祭りである場合が多いのですが、出エジプトの民の信仰と結びつき、ヤーヴェ信仰と結びついた歴史上の出来事と結び付けられています。出エジプトという苦難に満ちたしかし希望のある出来事を思い起こし心に刻みつけるためです。どの宗教でも祭り、祭儀は大変重要な意味を持っているのですが、日本のキリスト教の場合、もう少し日本の伝来の祭りを取り込むことがあっても良いのかもしれません。ローマ・カソリックのように365日すべてがだれか聖人の祝日というのも度が過ぎている気もしますが。9章には24日にイスラエル人は断食し、荒布をつけ、土を被って集まった、と記されています。そして「すべての外国人との縁を絶ったイスラエルの子孫は立ち上がって、自分たちの罪と、先祖の咎を告白した。3 彼らはその所に立ったままで、昼の四分の一は、彼らの神、主の律法の書を朗読し、次の四分の一は、告白をして、彼らの神、主を礼拝した」と書かれています。6時間律法朗読、6時間礼拝、という訳です。ここに「外国人との縁を絶った」というのが出てきます。エズラ記での“異教徒の妻を離縁し、子供を追放した”人々のことと思われます。のちに「ハシディーム」と称する敬虔主義の流れがユダヤ教に出てきますが、この人々はその先駆けと言えるかもしれません。修道生活に進んだクムラン教団のようなグループも生みました。6節から長いネヘミヤの祈りが始まります。9章の終わり、かつ本日の聖書箇所の終わり9:37までこの祈りが続きます。最初の第6節は「ただ、あなただけが主です。あなたは天と、天の天と、その万象、地とその上のすべてのもの、海とその中のすべてのものを造り、そのすべてを生かしておられます。そして、天の軍勢はあなたを伏し拝んでおります」とあり、創造主が礼拝されます。そのあとはアブラハムからのイスラエルの信仰を確認していきます。出エジプトの時代、預言者の時代、そして寄留の民の時代に到ります。これらの苦難はイスラエルの罪のためである、との告白を致します。しかし、31節で「しかし、あなたは大いなるあわれみをかけて、彼らを滅ぼし尽くさず、彼らを捨てられませんでした。あなたは、情け深く、あわれみ深い神であられますから」と言い、神への希望を語ります。ユダヤ人の信仰は驚くべきものです。あれだけの苦難の歴史の中でも信仰を捨てず、神の救いの希望に賭けているのです。あのホロコースとを生き残ったユダヤ人の存在は私など理解できるはずもないのですが、この生き残る力がこの歴史と信仰によるかすかな「希望」であったことは事実でしょう。イスラエル国歌は「希望」（ハクティーバ）と言いますが、この神への希望のみがイスラエルの信仰のアルファでありオメガでしょう。

　そして本日の聖書箇所になります。32節をお読みします。「私たちの神、契約と恵みを守られる、大いなる、力強い、恐るべき神よ。アッシリヤの王たちの時代から今日まで、私たちと私たちの王たち、私たちのつかさ、祭司、預言者たち、また、私たちの先祖と、あなたの民全部に降りかかったすべての困難を、どうか今、小さい事とみなさないでください」。神様に苦難を訴え、憐みを乞います。「恐るべき神」というのが出てきます。怒り、の恐れるより、畏れたてまつる、の恐れる、の方が適当な訳だ、という人もいますが、イスラエルの神は第一次的には「怒る」の恐れるべき神である、と言う点が重要です。恐ろしいので畏れ奉るような存在になるのです。その怒りの神が同時に愛の神であり、怒りを覆い尽くすまでに我々を愛していてくださる、というのが我々の信仰です。そして37節では「私たちが罪を犯したので、あなたは私たちの上に王たちを立てられましたが、その王たちのために、この地は多くの収穫を与えています。彼らは私たちのからだと、私たちの家畜を思いどおりに支配しております。それで私たちは非常な苦しみの中におります」と言い、苦難の現状を主に吐露しています。この王はペルシャ王と解し、ペルシャの税徴収の手厳しさを示していると解釈するのが通常のようですが、むしろ、カナン周辺の王達と考える方が良い、と思います。アモン王とかモアブ王、ペリシテ王とかフェニキア王と考え彼らが侵略してきて家畜を奪っていくような事態かもしれません。そのような苦難の中でも城壁工事等を進めて行ったのです。

　10章はその困難のなかでユダヤ人の結束を固める盟約が結ばれたことを記しています。そしてこれらの人々が中心になり宗教改革を進めていくのです。①異邦人に娘をやらず、異邦人の娘を嫁にしないこと、②安息日にはいかなる買い物もしないこと、③7年目の土地休耕作、借金無効化、④神殿礼拝のため一人1/3シェケル奉げること、⑤祭儀の時のいけにえを必ず欠かさないこと、⑥毎年定まった時に神殿に捧げものを持ってくること、⑦初物はかならず神殿に携えてくること、⑧初子は祭司のところに携えて来ること、⑨作物の1/10は祭司たるレビ人のものとして捧げることなどです。その後ユダヤ教が確立していく中で「安息日規定」が大変重んじられるようになっていきます。新約聖書のなかでイエス様とその弟子が安息日の戒めを破っている、とパリサイ派が非難する箇所がでてきます。エズラ、ネヘミヤはその後のユダヤ教の基礎を作った人と言われていますが、回りの国からいつ攻められ滅ぼされるかわからない、という状況の中で政治的・宗教的自立性を確保していこう、としているのですから、排他的なユダヤ教が形成されていくのは解らないでもありません。しかし、律法そのものはなにも他民族を敵視している訳ではなく、神がイスラエルを世界の救いの民として選び出されたのでその純潔を保ち、神の恵みがイスラエルの留まるための保証ということです。純潔を維持するため、他の民族とくに他の宗教への排斥的姿勢が出てくる、ということです。しかしこれが極端になると、偏狭な民族主義になります。離散の民でいる間はこの悪い面はあまり出てこないのですが、今のイスラエル国家のような形になるとその害悪は目に余るような事態となります。現在の中近東におけるすべての問題の出発点はイスラエル国家にあります。現在イスラエルはヨシュア記、士師記、サムエル記における他民族との戦いをもう一度やっているかの如くです。この旧約の歴史では民の救いには行きつかないことは証明されています。人間の罪は、人の手になる神の国は成立しない程深刻なのです。そのために神は主イエス・キリストの贖いの救いを示されたのです。もちろん、ユダヤ人のなかにもキリスト者がおり、現在のイスラエル国家のやり方を鋭く批判しています。キリスト者とまではいかないにしても主イエスがイスラエルが待ち望んでいたキリスト、メシアである、と認めるユダヤ教の一派もあります。

　11章はネヘミヤがエルサレムを都として繁栄させるために人口が増えるようにした政策のことを書いています。エルサレムに移り住んだ人々の名前が挙げられています。12章では最初にエルサレムに帰還したゼルバベルとヨシュアに率いられた人の名簿が再度掲げられています。そしてエルサレムで各種の役割分担がなされたことが記されています。31節以降に聖歌隊が編成されたことが書かれています。13章はまとめのような章です。アンモン人とモアブ人は神の礼拝に参加できない、という律法が見つかった、と書かれています。ネヘミヤの時期の祭司エリヤシブはネヘミヤの敵対者トビヤと通じていることがわかったのでトビヤの家を追放処分にしたことなどが書かれています。ネヘミヤは一時バビロニアに帰ります。これは彼が最初にエルサレム帰還するときペルシャ王に約束してきたことでした。それを果したのです。しかし、エルサレムに戻って来てからも改革を進めなければなりませんでした。特に安息日の律法が乱れていたことが挙げられています。またソロモンの罪として異邦人の妻を多数持っていたことをあげ、外国人の妻により異教の信仰が入り込むことを警戒しています。28節では「大祭司エルヤシブの子エホヤダの子のひとりは、ホロン人サヌバラテの婿であった。それで、私は彼を私のところから追い出した」と記されており、これがネヘミヤのサマリヤにおけるヘブライ信仰を誤り、と決定づけたところ、とされています。しかし、問題はあってもネヘミヤは大祭司エルヤシブを更迭したとは書かれていません。総督といえども大祭司職をどうこうすることもできなかった、と見るべきでしょう。このことは後にはむしろ大祭司がユダヤ人共同体の政治的指導者の地位もあわせ持つようになります。ローマ帝政は各民族の自治をかなり広く認めていましたから、イエス様の時代のユダヤでは大祭司カヤパが実質的な政治的指導者でもあったのです。ネヘミヤ記は総督ネヘミヤが宗教改革的施策を行ったことが記されていますが、イスラエルの伝統は決してそのような改革の道を良い事とはしていません。権力に対する警戒心が常に根底に流れています。それは人間の本性的罪、原罪といっても良いかもしれませんが、権力についての誘惑という罪は人間では取り払うことなど到底無理な根深いものである、ということを示している、と言えるでしょう。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日のひと時を感謝いたします。ネヘミヤの働きをとおしてユダヤ人の苦悩の跡をみました。律法を遵守することによって神の恵みの下にあることを保証しようとしたユダヤ教が成立しました。イエス・キリストを「人となられた神」と仰ぐ我々キリスト者の信仰とは大きな緊張を孕むものです。私たちが信仰の深みから、救い主への希望をみる、ネヘミヤの信仰をくみ取り、真のイスラエル信仰を見出すことができますよう、導きを希います。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。）